

進上 稱名寺侍者  
卜部兼好状

難陳言多不載愚  
狀併下向々顔之  
時可憐散候也

御寺付惣別  
無子細候覽

爲悦候抑上洛  
已後者雖便宜

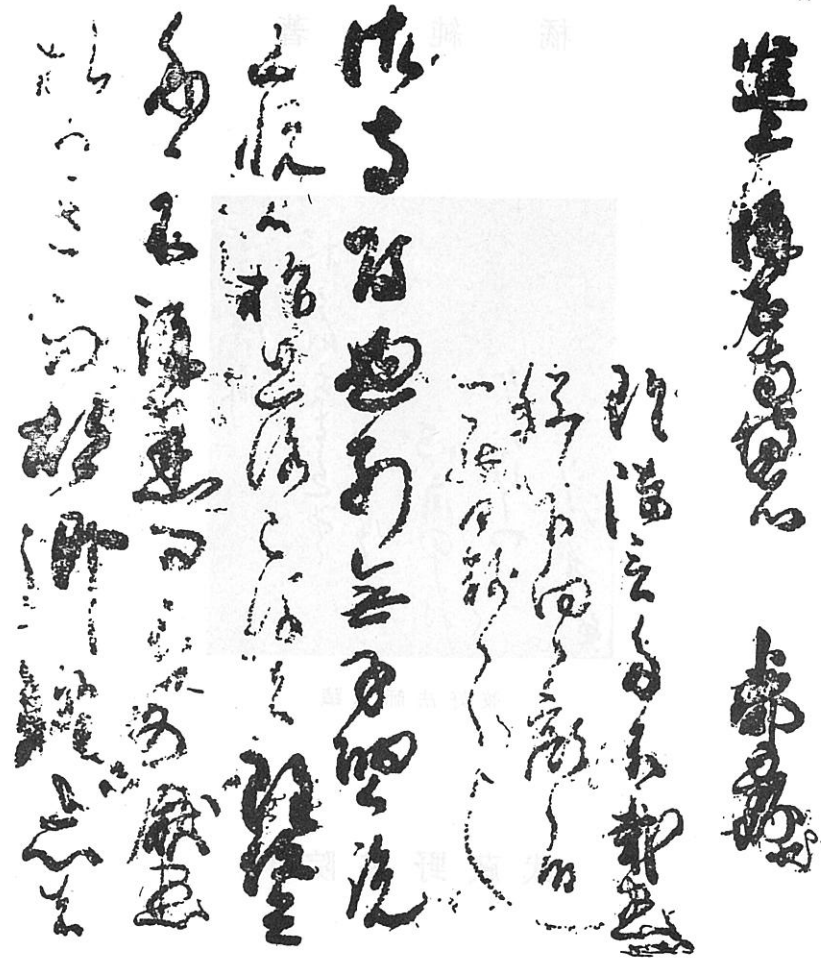
多候不詳恩問  
不為獻愚

札候き而  
故郷難忘者



評註 徒然草新講 目次

兼好筆蹟	扉表・裏	一
緒言・解説		七
系圖		一六
本		一六
序		一八
第一段	つれづれなるままに……	一八
第二段	いでや此の世に生まれて	一八
第三段	はにしへの聖の御代の……	二四
第四段	よろづにいみじくとも……	二五
第五段	後の世の事……	二六
第六段	不幸に愁にしづめる人の……	二七
第七段	わが身のやんごとなから	二八
第八段	んにも……	二八
第九段	あだし野の露……	三〇
第十段	世の人の心惑はず事……	三二
第十一段	女は髪をめてたからんこ	三二
第十二段	そ……	三四
第十三段	家居のつきづきしく……	三六
第十四段	神無月の頃……	四〇



第十二段	同じ心ならん人と……	四二
第十三段	ひとり燈火のもとに……	四四
第十四段	和歌こそ……	四五
第十五段	いづくにもあれ……	四八
第十六段	神樂こそ……	五〇
第十七段	山寺にかきこもり……	五一
第十八段	人は己れをつづまやかに	五一
第十九段	折節の移りかはるこそ	五二
第二十段	なにがしとかやいひし	五四
第二十一段	世捨人の……	五四
第二十二段	よろづのことは月見るに	六四
第二十三段	こそ……	六四
第二十四段	何事も古き世のみぞ……	六六
第二十五段	衰へたる末の世とはいへ	六六
第二十六段	ど……	六八
第二十七段	齋宮の野の宮に……	七一
第二十八段	飛鳥川の淵瀬……	七三
第二十九段	風も吹きあへず……	七三
第三十段	御園譚の節會……	七九
第三十一段	諒闇の思へばかり……	八〇
第三十二段	静かに年ばかり……	八一
第三十三段	人の亡きあそばかり……	八三
第三十四段	雪の面白うふりたりし朝……	八八
第三十五段	九月二十日の頃……	八九

—兼好法師筆懸紙及書状の一部— (武藏金沢稱名寺藏)



目次

第三十三段	今の内裏造り出されて……………	九一
第三十四段	甲香は……………	九二
第三十五段	手のわるき人の……………	九三
第三十六段	久しくおとづれぬ頃……………	九四
第三十七段	人のおとづれぬ頃……………	九四
第三十八段	朝夕へだてなくなれたる人の……………	九五
第三十九段	名利につかはれて……………	九六
第四十段	或人法然上人に……………	一〇一
第四十一段	因幡國に……………	一〇三
第四十二段	五月五日賀茂の競へ馬唐橋の中將といふ人の……………	一〇四
第四十三段	春の暮つ方……………	一〇七
第四十四段	あやしの竹の編戸の……………	一〇八
第四十五段	公世の二位の兄人に……………	一一〇
第四十六段	柳原の邊に……………	一一三
第四十七段	或人清水へ参りけるに……………	一一五
第四十八段	光親の卿院の最勝講奉行して……………	一一七
第四十九段	老來りて……………	一一八
第五十段	應長の頃伊勢の國より……………	一二一
第五十一段	龜山殿の御池に……………	一二三
第五十二段	仁和寺にある法師……………	一二五
第五十三段	これも仁和寺の法師……………	一二六
第五十四段	御室にいみじき兒の……………	一三〇
第五十五段	家の造りやうは……………	一三三
第五十六段	久しく隔たりて……………	一三四
第五十七段	人の語りいでたる歌曲語の……………	一三六
第五十八段	道心あらば……………	一三七
第五十九段	大事を思ひ立たん人は……………	一四〇
第六十段	眞乘院に盛親僧都とて……………	一四二
第六十一段	御産の時……………	一四七
第六十二段	延政門院……………	一四八
第六十三段	後七日の阿闍梨……………	一四九
第六十四段	車の五つ結は……………	一五〇
第六十五段	此の頃の冠は……………	一五一
第六十六段	岡本の關白殿……………	一五二
第六十七段	賀茂の岩本橋本は……………	一五六
第六十八段	筑紫にながしの押領使とかや……………	一六〇
第六十九段	書寫の上人は……………	一六一
第七十段	元應の清善堂の御遊に……………	一六四
第七十一段	名を聞くより……………	一六六
第七十二段	賤しげなるもの……………	一六八
第七十三段	世に語り傳ふる事……………	一六九
第七十四段	蟻の如くに集まりて……………	一七三
第七十五段	つれづれわぶる人は……………	一七五
第七十六段	世の亂え花やかなるあ……………	一七五



目次

第七十七段	世の中にその頃人の……………	一七八
第七十八段	今様の事どもの……………	一七九
第七十九段	何事も入り立たぬ様……………	一八〇
第八十段	人毎に我が身にうとき……………	一八一
第八十一段	屏風障子などの……………	一八四
第八十二段	うすもの表紙は……………	一八五
第八十三段	竹林院の入道左大臣殿……………	一八七
第八十四段	法顯三藏の……………	一八九
第八十五段	人の心すなほならねば……………	一九〇
第八十六段	惟繼の中納言は……………	一九二
第八十七段	下部に酒飲まする事は……………	一九四
第八十八段	或者小野道風の書ける……………	一九八
第八十九段	奥山に猫またといふもの……………	一九九
第九十段	大納言法印の……………	二〇二
第九十一段	赤舌川といふ事……………	二〇三
第九十二段	或人弓射る事をならぶ……………	二〇五
第九十三段	牛を賣る者あり……………	二〇八
第九十四段	常磐井の相國……………	二一一
第九十五段	箱のくりかたに……………	二一二
第九十六段	めなもみといふ草……………	二一四
第九十七段	其の物に附きて……………	二一五
第九十八段	たふとき聖のいひ置き……………	二一五
第九十九段	堀川の相國は……………	二二六
第一百段	久我ノ相國は……………	二二八
第一百一段	或人任大臣の節會の……………	二二〇
第一百二段	尹ノ大納言光忠入道……………	二二二
第一百三段	大覺寺殿にて……………	二二四
第一百四段	荒れたる宿の人目無き……………	二二四
第一百五段	北の屋かげに……………	二二五
第一百六段	高野の證堂上人……………	二二九
第一百七段	女の物いひかけたる返事……………	二三〇
第一百八段	寸陰惜しむ人なし……………	二三一
第一百九段	高名の木のぼり……………	二三六
第一百十段	雙六の上手といひし人……………	二四〇
第一百十一段	園基雙六好みて……………	二四二
第一百十二段	明日は遠國へ……………	二四三
第一百十三段	四十にも餘りぬる人の……………	二四四
第一百十四段	今田川のおほい殿……………	二四七
第一百十五段	宿河原といふ所に……………	二四八
第一百十六段	寺院の號……………	二五〇
第一百十七段	女とするに……………	二五三
第一百十八段	鯉のあつもの食ひたる……………	二五四
第一百十九段	日は……………	二五五



目次

第百十九段	鎌倉の海にかつをとい	二五八
第百二十段	ふ魚は	二五九
第百二十一	唐の物は	二五九
段	養ひ飼ふ物には	二六〇
第百二十二	人の才能は	二六二
段	無益の事をなして	二六四
第百二十三	是は法師は	二六六
段	人におくれて	二六七
第百二十四	博打の負きはまりて	二六九
段	改めて益なき事は	二七〇
第百二十七	雅房の大納言は	二七〇
段	顔回は	二七三
第百二十九	物に争はず	二七五
段	貧しき者は	二七八
第百三十一	鳥羽の作り道は	二八〇
段	夜の御殿は	二八〇
第百三十三	高倉院の法華堂の三昧	二八〇
段	僧	二八二
第百三十五	資季の大納言入道	二八六
段	くすし篤成	二八九
第百三十七	花は盛り	二九一
段	祭過ぎぬれば	三〇三
第百三十九	家にありたき木は	三〇六
段	身死して財残る事は	三一〇
第百四十一	悲田院の遊蓮上人は	三一二
第百四十二	心無しと見ゆる者も	三一五
段	人の終焉の有様	三一八
第百四十三	根尾の上人	三一九
段	御隨身秦の重朝	三二一
第百四十五	明雲座主	三二二
段	灸治あまた所になりぬ	三二三
第百四十七	れば	三二四
段	四十以後の人	三二四
第百四十八	鹿茸を鼻にあてて	三二五
段	能をつかんとする人	三二五
第百五十	西人のいはく	三二七
段	或大寺の静然上人	三二九
第百五十二	爲兼の大納言入道	三三一
段	此の人東寺の門に	三三一
第百五十四	世にしたがはん人は	三三五
段	大臣大慶は	三三八
第百五十六	筆を取れば	三三九
段	盃の底を捨つる事は	三四一
第百五十八	みなむすびといふは	三四四
段	門に額掛くるを	三四四
第百六十	花の盛りは	三四六
段	遍照寺の承仕法師	三四六
第百六十二	太衝の太の字	三四八
段	世の人相會ふ時	三四八
第百六十四	あづまの人の	三四九
段		
第百九十九	妻といふものこそ	四〇一
段	夜に入りて	四〇三
第百九十一	神佛にも人のまうでぬ	四〇三
段	日	四〇五
第百九十二	くらき人の	四〇六
段	達人の人を見る眼は	四〇七
第百九十三	或人久我繩手を通りけ	四〇七
段	るに	四一一
第百九十四	東大寺の神輿	四一一
段	詣寺の僧のみにあらず	四一二
第百九十五	揚名の介に限らず	四一四
段	横川の行宣法印が	四一四
第百九十六	吳竹は葉細く	四一五
段	退凡下乗の率都婆	四一六
第百九十七	十月を神無月といひ	四一七
段	勤勤の所に	四一七
第百九十八	犯人を管にて	四一八
段	比叡山に大師勧請の	四一九
第百九十九	徳大寺の故大臣殿	四二〇
段	龜山殿建てられんとて	四二二
第百九十九	經文などの紐をゆふに	四二二
段	人の田を論ずるもの	四二五
第百九十九	喚子鳥は	四二七
段		

目次

第百六十六	人間の誓みあへるわざ	三五〇
段	を	三五〇
第百六十七	一道に携はる人	三五〇
段	年老いたる人の	三五三
第百六十八	何事の式といふ事は	三五三
段	さしたる事なくて	三五六
第百六十九	貝を覆ふ人の	三五七
段	若き時は	三五九
第百七十	小野ノ小町が事	三六一
段	小鷹によき犬	三六四
第百七十一	世には心得ぬ事の	三六五
段	黒戸は	三六七
第百七十二	鎌倉の中書王にて	三七六
段	或所の侍ども	三七八
第百七十三	入宋の沙門道眼上人	三八〇
段	さぎちやうは	三八二
第百七十四	さげふれこゆき	三八二
段	四條大納言隆親卿	三八四
第百七十五	人つく牛をば	三八五
段	相模守時頼の母は	三八五
第百七十六	城ノ陸奥守ノ泰盛は	三八八
段	吉田と申す馬乗の	三八九
第百七十七	よるづの道の人	三九〇
段	或者子を法師になして	三九〇
第百七十八	今日は其の事を	三九一
段		
第百九十九	妻といふものこそ	四〇一
段	夜に入りて	四〇三
第百九十一	神佛にも人のまうでぬ	四〇三
段	日	四〇五
第百九十二	くらき人の	四〇六
段	達人の人を見る眼は	四〇七
第百九十三	或人久我繩手を通りけ	四〇七
段	るに	四一一
第百九十四	東大寺の神輿	四一一
段	詣寺の僧のみにあらず	四一二
第百九十五	揚名の介に限らず	四一四
段	横川の行宣法印が	四一四
第百九十六	吳竹は葉細く	四一五
段	退凡下乗の率都婆	四一六
第百九十七	十月を神無月といひ	四一七
段	勤勤の所に	四一七
第百九十八	犯人を管にて	四一八
段	比叡山に大師勧請の	四一九
第百九十九	徳大寺の故大臣殿	四二〇
段	龜山殿建てられんとて	四二二
第百九十九	經文などの紐をゆふに	四二二
段	人の田を論ずるもの	四二五
第百九十九	喚子鳥は	四二七
段		



目次

第二百一十一段	よろづの事はたのむべからず……………	四二九
第二百一十二段	秋の月は……………	四三二
第二百一十三段	御前火燭に……………	四三二
第二百一十四段	想夫戀といふ樂は……………	四四二
第二百一十五段	平ノ宣時朝臣……………	四三五
第二百一十六段	最明寺ノ入道……………	四三七
第二百一十七段	或大福長者のいはく……………	四三九
第二百一十八段	狐は人に……………	四四四
第二百一十九段	四條ノ黃門……………	四四五
第二百二十段	何事も邊土は……………	四四九
第二百二十一	建治弘安の頃は……………	四五二
第二百二十二段	竹谷の乘願房……………	四五三
第二百二十三段	たづのおほいどのは……………	四五五
第二百二十四段	陰陽師有宗入道……………	四五五
第二百二十五段	多久資が申しけるは……………	四五五
第二百二十六段	後鳥羽院の御時……………	四五八
第二百二十七段	六時禮讃は……………	四六〇
第二百二十八段	千本の釋迦念佛は……………	四六一
第二百二十九段	よき細工は……………	四六一
第二百三十段	五條内裏には……………	四六二
第二百三十一段	圓の別當入道は……………	四六三
第二百三十二段	すべて人は……………	四六六
第二百三十三段	よろづのとがあらじと思はば……………	四六八

六

第二百三十四段	人の物を問ひたるに……………	四六九
第二百三十五段	主ある家には……………	四七二
第二百三十六段	丹波に出雲といふ所……………	四七四
第二百三十七段	柳笛に据うるものは……………	四七七
第二百三十八段	御隨身近友が……………	四七八
第二百三十九段	八月十五日九月十三日は……………	四九二
第二百四十段	しのぶの浦の蟹の見るめも……………	四九三
第二百四十一段	望月のまどかなる事は……………	四九六
第二百四十二段	としなへに運順につかはるる事は……………	四九九
第二百四十三段	八つになりし年……………	五〇〇
録	語句索引……………	五〇三
附	宮城の図……………	五四三
内裏の図……………	五四四	
京都附近図……………	五四五	
挿絵図版目次……………	五四六	
皇室及貴族の事ども……………	五四八	
目次終		四九二

緒言

本書は旧著「つれづれ草通釈」(戦災のため絶版)の【通釈】の部を本とし、これに旧著の【釈】(語釈)の部を簡約して頭註とし、更に一段の大意を要約又は批評した【段意】の項を添えたものである。なお旧著では本文が別冊になっていたのであるが、このたびは最近校訂を加えて通常流布の本文よりもよほどよくなつたと自信する本文を、段或は節ごとに最初にかかげることとした。これら本文の添加や語釈の要約や、その他万端、慶野正次氏(兵庫県立明石高校教諭)にやっていたいただいた。又本書中一五〇図ほどの図版は、前田信氏(武蔵野書院主人)の異常な御骨折の結果である。このお二人の御援助に対し、厚い感謝をささげるものである。

これで前著「つれづれ草通釈」よりは、ずっと普通の註釈書の体裁に近づいたのであるが、それでもまだ大分変つた所がある。もともとそれはわるい方に変つていたのでないと思はれているが、とにかく変つているところがあるからには、一応説明して、読者諸君の御了解を願つておく必要がある。

諸君が【通釈】の文を読んで第一に気のつくことは「」にはといった部分がかなり多いこと、

序 段

徒然なるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

【遍釈】 手持不沙汰なのにまかせて、終日硯に対つて、心「ノ鏡」に映つて「ハ消エ、映ッテハ消エシテ」行くやくにも立たぬむだごとを、とりとめもなく書きつけたところが、「ソノ書ケタモノハ」ほんとうにへんに、わけもわからぬものであるわ。

【段意】 終日執筆した何枚かの原稿を更に読み直してみて、その感想を書いたていにしてあるが、実は全篇の序である。

第一段

いでや、この世にうまれては、願はしかるべき事こそ多かんめれ。御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり。ただ人も、舍人など賜はるきは

通釈

第一段

○いでや 話しはじめにいう語であるが、はりきって言い出すのではなく、ひかえめな気分という感動詞。  
○多かんめれ 多かる

はゆゆしと見ゆ。其の子孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それよりしもつかたは、程につけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

【遍釈】 いやどうも「人ガ」此の世の中に生れて来たからには、誰しも願わしいような事が多いであらう。「願ワシイ事トイエバ、先ズ第一ニ家柄ノヨイコトデアルガ、サリトテ」

天子様の御位は「コレヲ彼是申スノハ」まことにどうも、もったいない。「イヤ、天子様バカリデハナイ」孫王様までも、人間界の御胤でないことは、まことに貴い事である。攝関家の御生活はいうまでもないこと、攝関以外の家でも近衛舍人などを下される身分の人はすばらしいものに思われる。その「攝関家ヤ、



舍人(隨身・番長)  
(国立博物館蔵隨身庭騎図)

第一段